

静寂か再生か

——芭蕉「古池や」を読んで——

林 文 賢

古池や蛙飛びこむ水の音 芭蕉

上は芭蕉開眼の句として有名な俳句である。池田弥三郎は『俳句・俳人物語』において、次のように解釈している。^①

古池や。蛙飛びこむ 水の音 芭蕉

古い池の沈滞。

ふと音がして、かわずが飛びこんだ、——

池はもとの沈黙。

蛙が春の季題です。深閑とした古池に、ぼちゃんとかえるのとびこんだ音がし、波紋がひろがって、またもとの静寂な世界にかえったという句です。かえるのとびこむ音が、それまでの、そしてそれからのしずかさをいっそうふかめています。

池田の解釈から見れば、この句のトピックは静寂にあるようである。ポチャンと蛙が水の中に飛び進んだ音が、かえって静かさと対照になり、その静寂な世界

① 池田弥三郎『俳句・俳人物語』52 ぺ。

を目立たせたのではなく、耳立たせたのである。

池田の解釈は、芭蕉の句の、数多くの解釈の中の一つに過ぎないのである。トピックの設定が変わってしまうと、解釈がおのずから異なってくるのである。

イタリアの記号学者エコによれば、トピックとは次のようなものである。

トピックをコード解読するテストの一つは、各テキストをある問いへの答えと見ることにある。(中略)読者とは、潜在的に問いを発する者なのであり、その問いに対しての答えがテキストなのである。読者は問いを考え出しながら、そのテキストが何について語っているのかを理解するのである。^②

私としては、トピックとは、読者によって提起されながら、それから、テストの中で解消されるべき、質問と見做したい。しかしながら、トピックとは、私をして、あるテキストに首尾一貫性を付与することを可能ならしめるのである。^③

まとめていうと、

- 1、ひとつの詩歌をひとつのテキスト^④として見做す。
- 2、トピックとはテキストを解読するためのテストである。
- 3、トピックの設定権は作者側ではなく、読者側にあるのである。
- 4、トピックの設定は読者が質問するのと同じく、そして、その質問に答えるのは、作者ではなく、テキストなのである。
- 5、トピックというものが、テキストに首尾一貫性を付与する。

ということになる。そして、これらの概念を池田の解釈に当て嵌めると、次のようなことが言える。即ち、池田という読者が、前出した芭蕉の句、つまり、テ

② エコ (1993) 166～167 ペ。

③ 前掲書 177 ペ。

④ 前掲書 140 ペを参照。

クストに対して、静寂というトピックを設定しながら、静かですかと、問うてみるのである。そして、蛙が飛び込んで水の音がする程静かですよ、と、芭蕉本人ではなく、テキスト自身が答えるのである。

しかし、エコがやっているように、一つのテキストに対しても複数の読者がおり、一つのテキストにおいても、複数の作者に対峙することになるから、違った読者が違ったトピックを選んでも当たり前である。言い換えると、芭蕉の句に対し、静寂の外に、別のトピックが設定されても、おかしくないのである。

池田の解釈では、静かさを維持するためか、強いていえば、首尾一貫性を付与するためか、水の音に重きを置いた半面、蛙という春の季題の特性、飛び込むという動作のアスペクトの特性を麻痺させてしまう傾向があるようである。

池田の解釈で行けば、蛙が水に飛び込む季節はどうでもいいような気がする。春でもいいし、夏でもいい。秋でもかまわないし、冬でもかまわない。とにかく、水の音さえすればよいのである。しかし、芭蕉の句において、春という季題である蛙を使うには、必ずわけがあると思う。ちょうど、中国の詩人韋応物の五言絶句

懷君屬秋夜，
散步詠涼天。
空山松子落，
佳人應未眠。

のように、秋だから松子が落ちる、というふうに、冒頭に時間を設定し、そして、後に出てくる事件が設定された時間に必ず何かの連関を持たなければならない。池田の解釈にこういう時間の連関がないのは、玉に瑕である。

また、飛び込むという動詞については、池田の訳語には「飛びこんだ」と出ている。つまり、過去というテンスの特性を働かせ、助動詞「た」をつけて解釈しているのである。しかし、こうなると、動詞のアスペクトの特性が抑さえられてしまうのである。文語において、「動詞連体形＋名詞」という構造は、「～た」

と訳さず、「～ている」と訳す例は現にいくつもある。

新聞に記者会見をしているところの総理大臣の写真が載り、傍らに

記者会見する総理大臣

と説明がついている。また、川端の「鳥がとまる枝の枯葉がかさかさ鳴る程静かである」という文は

鳥が止っている枝の枯葉……

と解釈したほうが、

鳥が止った枝の枯葉……

という解釈より、情景としてはもっと適切ではないかと思う。さらに、

米洗ふ前に螢の二つ三つ

においても、「米洗ふ」というところを、「米を洗っている」と訳した例がある。

ところで、アスペクトを考慮に入れ、「飛び込む」を「飛び込んでいる」と見るなら、全体が「蛙が飛び込んでいる水の音」になってしまうと、静かさどころか、かえって賑やかさがにじんでくるのではないか。こうなると、賑やかさというトピックが、いかにして芭蕉の句に首尾一貫性を付与するのであろうか。

結論を先に言えば、再生なのだ。自然が循環して止まず、生生不息というふう
に解釈すれば辻褄が合うのである。

芭蕉の句は中国の詩人謝靈運の詩句^⑤。

池塘生春草

園柳變鳴禽

⑤ 梅祖麟・高友光（1947）30 ペを参照。

と同じ詩情を詠じているのである。ただ、謝の上の句は目に訴え、下の句は耳に訴え、全体としては生生不息という自然の循環を一般的な春草の情景、鳴禽の動作に託して詠じているのに対し、芭蕉の句は、目にも耳にも訴えてはいるが、季節の循環を個別的な蛙の動作に託して表しているのである。

原型イメージ的に批評すれば、蛙は春の季題であり、春は新しい生のイメージである。水は創造の神祕を表し、誕生——死——再生というサイクルのイメージを表している。^⑥

さらに、原型モチーフ的に解釈すれば、芭蕉の句は、不滅という、基本的な原型モチーフを表しているのである。^⑦ 厳しい冬を経て、水が涸れ、すべての物が死滅した、と思っていた池では、意外にも、春の象徴である蛙が生息していて、その蛙の飛び込んでいる水の音によって、死寂と思っていた周りが急に活気を呈していることで、春の訪れ、自然の循環に感動させられたものを詠じているものである。

以上で分かるように、エコの、複数読者、複数作者、複数トピックという概念を導入することによって、芭蕉の句は、多方向に読まれることになる。それゆえ、題目の質問「静寂か再生か」に答えるなら、以下のようにしか答えられないだろう。——静寂と読もうと、再生と読もうと、読む者の勝手である。要は首尾一貫であればよいのである。——ただ私としは、再生と読み取りたいのだが……………。

(1995年春)

参考文献

池田弥三郎，1966，『俳句・俳人物語』，ポプラ社。

梅祖麟・高友光，黄宣範訳，1947，「論唐詩的語法，用字與意象」『語言學研究

⑥ ゲーリン（1986）228 ペ。

⑦ 前掲書 234 ペ。

論叢』，黎明文化公司。

ゲーリン等，1986，『文学批評入門』，彩流社。

エコ著，谷口勇訳，1993，『テキストの概念』，而立書房。